
食人館《しょくじんかん》

カワニシ美玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しよくじんかん
食人館

【Nコード】

N4636Z

【作者名】

カワニシ美玲

【あらすじ】

大学生生活最後の思い出にと、真下秋宏は恋人の涼花を含む五人で山にピクニックに出かけた。しかし山に向かう途中の森林で道に迷ってしまい、やっとの思いで森林を抜け出すとそこには古びた館が……。

好奇心に誘われ館の中に入った六人を待っていたのは、人肉を喰らう化け物だった。

プロローグ（前書き）

これは一部ホラーや残酷な要素が含まれていますので、そういった類の苦手な方は観賞をお控えください。

プロローグ

『ここに迷い込んでからもう何年の年月が過ぎ去ったのだらう。疲労や食糧不足で身体は限界のようです。誰か助けてください。またあいつが来る。』

あいつにまた見つかったら、僕は今度こそ死を覚悟しなければなりません。

だからお願いです。誰でもいいんです、早く助けてください。僕をここから出しーーー』

これは、とある廃墟はいきょになった館から発見された置き手紙。手紙の内容はここで途切れていて、続きを発見することはついに出来なかったという。

ただ唯一、この置き手紙の最後の一文と思しき切れ端だけは発見できている。しかし所々に染みのようなものが付着し、その一文から解読できた言葉は以下の通りである。

『ーーーさーーーならーー涼花ーーーてる。ーーー秋宏』

絶望の予兆

晴天。今日の空模様を一言で表すのなら、それが一番合っているだろう。

海よりもさらに広大に見える青空。雲も景気よくあちこちを浮遊している。

そんな何気ない日常にさえ、今日の真下秋宏は目がいつてしまう。なんといいっても今日は、僕の大学生活最後の一日なのだ。それを祝福するかのような天候にいつい目がいつてしまうのも、必然といえれば必然である。

それに、今日の僕はある人に大事なことを伝えなければいけない。受け入れてくれるか、多少の不安はあるものの言ってみなければ結果は誰にも分からない。

要するに、当たって砕けるといつたところだ。

「秋ちゃん！」

と、不意に後ろから声をかけられた。同時に締めりなく開いていた口元が、きゅっと引き締まる。そして後ろに振り向くと一人の女性が立っていた。名前は神戸涼花、この大学を受験した時に知り合った彼女は今では友達ではなく、恋人として僕と付き合っている。

艶のあるサラサラとした長い黒髪に、小顔でどこかおっとりした顔立ち。身長は百七十センチと、女性にしては背が高くモデルのような綺麗なプロポーションを保っている。

そんな彼女が、地味でこれといった長所もない僕なんかと付き合っているというのは、些かな疑問でもある。

「秋ちゃんどうしたの？ 話があるって何？」

涼花が穏やかな優しい声で僕に問いかけてくる。

「いや、ええっと……。その、ね」

緊張からか、少々口ごもってしまう。それでも秋宏は意を決して少しずつ、少しずつ話し始めた。

「今日でさ、大学生活も終わりだね」

「そうだね〜。……友達とも会う機会が少なくなるし、寂しくなっちゃうね」

涼花はそう言いながら、心底残念しんぞこそうな顔を僕に向けてくる。

「うん……。それで、さあ……僕達も大学終わったら会える機会が少なくなるかもしれないじゃん？」

「う〜ん、確かに……。私、秋ちゃんとなかなか会えなくなるのは嫌だな」

「それで、なんだけどさあ……」

秋宏はそこで一旦話すのをや

め、目を閉じる。そして頭に疑問符を浮かべ次の言葉を待つ涼花に緊張した面持ちでこう告げた。

「……僕達、結婚しないか？」

「……え？」

予想していた通りの、長々とした沈黙。しばらくの間、お互いの言動が強制的に一時停止される。

そして、先に沈黙を破ったのは涼花の方だった。

「……うん」

消え入りそうな声だったが、涼花は確かにそう言った。ということ
はつまり……、

「……オツケー？」

涼花は二度同じことは言わず、ただ黙って微笑んだ。途端に秋宏の両足から力が抜け、秋宏は地面に膝から崩れ落ちる。

「あ、ちよつと秋ちゃん！？ 大丈夫？」

地面に倒れた僕に、涼花が心配そうに駆け寄る。

「大丈夫、返事聞いて安心したら腰が抜けちゃって」

そうはにかみながら答える。すると涼花は、

「もう、……秋ちゃんの馬鹿」

そう言ってから静かに微笑み、僕の頬に優しくキスをした。

「お、いたいた。真下ー」

するとそんな二人のいい雰囲気などお構いなしに、遠方から自分を呼ぶ慣れ親しんだ声が耳に届く。

「あゝっ悪い、取り込み中だったか？」

そう言いながら僕ら二人に話しかけてきたのは、一人の大柄な男だった。

身長、百八十センチ。角刈りにされた髪型に加え目付きが悪く、傍目から見たらヤクザに誤解され兼ねないこの男の名は松村大輝まつむらたいきといい、涼花と同じく大学で知り合った僕の男友達の一人である。

「大丈夫だよ。で、何？」

両足が機能してきたので、地面から立ち上がりながら横目で松村に返答を促す。

「ああ、そうそう。ほら今日で大学も終わりだろ？ だから最後にみんなで集まって、思い出作らないかな？ って……どう？」

「思い出作りか……。涼花、どうする？」

涼花に言葉を伝達すると、涼花は普段通りの穏やかな声で、「いいんじゃないかな？ みんなで思い出作ろうよ！」と答えたので僕も思い出作りに参加することに決めた。

松村が言うにはもう案は決まっていて、僕らの大学からちようど東に見える山にピクニックに行くとのことだった。尚、山に着くまでの移動手段は車で、松村の親友であり僕の友達でもある柴村浩太しばむらこうたが来て運転することになっている。

その他にも、涼花の友達である白川真奈美しろかわまなみさんや佐々川香苗ささがわかなえさん。さらには佐々川さんの双子の兄で、僕の友達の佐々川直人ささがわなおとも来てくれるらしい。

みんな大学生活最後とあって、派手に遊んでやろうという気持ちでいっぱいらしい。

「あいよ。じゃあ、二時間後にここに集合してればいいんだな？」

松村から受け取った伝言を、再確認のためもう一度聞く。松村は「ああ」とだけ言って頷き、不都合があったら電話してくれと言ってその場を去っていった。

すると、今まで僕の隣で黙って話を聞いていた涼花が口を開いた。
「ふふ、楽しみだねー。みんなで大学の最後の思い出いっぱい作る
うね、秋ちゃん」
と笑顔で僕に言う。僕はその満面の笑みを浮かべる涼花に、
「うん、そうだね。」
と言い、ピクニックの準備のため「じゃあ二時間後にね」と僕らも
その場を離れた。

絶望の序章

そして二時間後、僕は山に行く準備を整えて集合場所に着いた。まだ涼花も松村の姿もなく、どうやら僕が一番乗りのようだ。

「あ、真下さん。早いですね」

と思っていると、どうやら僕よりも前に来ていた人がいたらしい。視界に一人の女性が映る。

「ああ、どうも白川さん。そっちも随分早いな」

「何言ってるんですか。今日は大学生生活最後の一日なんですよ！

気合入れていかないか！」

そう言っつて白川さんはグツと拳を握る。この男勝りの性格である白川さんは、涼花の高校時代からの友人である。僕も涼花と付き合い始めてから、白川さんと話すようになり今では女友達の一人となっている。

ちなみに身長は百七十二センチと僕より一センチ大きい。髪の毛も短く、遠目に見ると本当に男にも見えてくる。

「そうだね、最後ですもんね。……他の人はまだ来てないんですか？」

白川さんにそう尋ねると、「さっき電話で香苗がもうすぐ来るって言っつてましたよ」という返事が返ってきた。それから二人で待つこと約十分、集合場所に向かって遠くから佐々川兄妹が歩いてきた。佐々川香苗が僕らの姿を確認すると、ぶんぶんと手を振ってくる。そんな妹のすぐ隣を歩いている兄の佐々川直人も、こちらに軽く手を上げて挨拶をしてきた。

「真奈美、早いね。私達が一番乗りだと思っつてたのに」

「ふふ〜ん。まだまだ甘いわね、香苗」

白川と香苗の二人が痴話を始め出し、直人の方も鞆から本を取り出して、それを黙々と読み始めた。

この兄妹の兄である直人は、物静かで暇さえあれば基本的に読書を

している文学少年だ。地味なところは自分と似ているのだが、顔がものすごく美形で女性によくモテているのが僕とは違ふところだ。妹の香苗も兄によく似た美形な顔立ちで、きつと涼花と出会っていなければ僕も好きになっていたんじゃないだろうかと思う。

そんな二人が来てから五分後に松村が到着し、涼花もそれからすぐに集合場所に姿を見せた。

「それじゃあ、柴村の車が駐車してあるところまで行くぞー」

松村の掛け声に、その場にいる全員が移動を開始する。柴村の車は、集合場所から約百メートル離れた場所に駐車されていた。

「お、みんな来たね。待つてたよ」

駐車場で一人待つていた柴村は、集合した全員の人数を確認すると車のエンジンをかける。

柴村浩太は松村ほどではないが身長が高く百七十八センチもあり、オールバックにされた髪型と両耳についているピアスが印象的な男である。

ちなみに身長順に並ぶと、僕はこの男子の中の面子めづでは一番背が低い。涼花も女性人の中では下から二番目だ。そんなことを考えていると、

「……よし。じゃあ、そろそろ出発するか」

と車の中にみんなの手荷物を詰め終えた柴村が宣言したので、一行は最後の思い出作りのために車に乗り込む。そして運転席に柴村が乗り、六人を乗せた車は山に向かい走り出した。

それから山に着くまでの間、自分は涼花とお喋りをしたり直人に本を借りたりして時間を潰していた。車は大学の駐車場を出てから約一時間で、目的地である山の手前までやってきた。柴村はそこで一旦車を止め、「どっちから行く？」と前方を指差しながら僕らに問いかけてきた。

前に視線を向けると、右折方向みぎまがには一般的な道路が続いていて、山が見える左折方向ひだりまがには森林が生え道なき道が続いている。

「一応どっちからでも行けると思うんだけど……」

柴村が困った顔をしてみんなの意見を待っていると、

「左折してみれば？ そっちの方がちょっと山に近そうだし、なんか面白そうじゃん？」

という白川の意見で、六人を乗せた車は山に近い森林が生い茂る^{しげ}左折方向に走り出した。

それから道なき道を走ること約三十分。僕達は案の定、森林の中を彷徨^{さまよ}っていた。

来た道も判断がつかず、気がつけば前後左右どこを見ても森が続いていた。

「……大丈夫かな？ 秋ちゃん」

周囲の景色を見ながら、涼花が心配そうに尋ねてくる。

「大丈夫。……きっと抜け出せるって」

そうは言うものの、秋宏自身にも多少の不安はある。車はさらに森林の奥に向かうが、抜け出せる気配はない。携帯も圏外になっていて、電話で助けを求めることも不可能になってしまっている。すると白川がしゅんとした顔で、

「すみません……。私が馬鹿なこと言わなければ……」

と落ち込んでしまう。それを香苗や松村が「大丈夫大丈夫！」と励^{はげ}ます。

すると今まで黙って本を読んでいた直人が、口を開いた。

「とりあえず、車を降りて歩

いてみないか？」

「……車はどうすんだよ？」

柴村が口を挟むと直人は静かに、

「この際、車は仕方ないだろう……。今はこの森を出ることを第一に考えないと」

「マジかよ。結構高かったんだぜ？ ……この車」

柴村は少々悩んだ後、ため息をつきながら車を止めた。そして運転席から外に出る。

「まあ、事前に俺が山に行く道調べなかったのが悪いからな……」。

みんな降りるぞ」

柴村が言つて、直人から順に五人は車から外に出た。そこまではいいのだが問題はここからである。

「で、これからどうするんだ？ 直人」

僕が問いかけると、直人は辺りを軽く見渡してから顎あごに手をやる。それから数十秒ほど考える仕草をした後、「こつちの車じゃ通れない道を行つてみよう。もしかしたら、見晴らしのいい所に出るかもしれない」と森の中に歩いていく。取り残された五人は顔を見合わせ、他に当てもないことから直人の案に賛成することにした。

「一か八かだ。……行くぞみんな！」

松村の言葉と共に、五人も直人の後に続き森の中に入っていった。道なき道から、さらに道なき道へと六人は突き進む。歩き始めてからもう一時間は経つたが、一向に見晴らしのいい所に出る気配はない。さらに日が暮れてきて、急がなければ夜になってしまう。

「やばいぜ……。どうするよ？ 直人」

「……ここまで来てしまったんだ。歩くしかないだろう」

「おいおい、野宿のじゆくだけはごめんだからな？」

そんな会話をしている時だった。涼花が「あつ！」という声を上げた。全員の視線が涼花に向けられる。

「あれ、……家じゃない？」

と、目を細めて遠くを見つめる。秋宏も涼花の見つめる方向に視線をやると、遠方に大きな家のようなものが見える。

「こんな森の奥に、……家？」

「行つてみよう」

松村が家らしきものが建っている場所に向かって歩き出したので、五人も続く。そして、だんだんと家のようなものの正体が分かってきた。

「……なんかの屋敷っぽいな。なんだつてこんなところ？」

柴村が驚愕きょうわくした顔で呟つぶやく。そう、涼花が見つけた家のようなものの正体は、何年も前に廃墟になったと思われる大きな屋敷だった。

「どうする？ 入ってみるか？」

松村が言つと、少し元気を取り戻した白川が口を開く。

「野宿よりはまだマシだし。私は入ろうと思うけど、……みんなは？」

「……もう日も沈む。他に選択肢なんかはないよ」

直人が空模様を確認しながら、冷静に判断する。他の全員も森で野宿するくらいならと、松村の意見に賛成した。

「……なんかごめんな、涼花。こんなことに巻き込んだじゃって」

涼花に申し訳ない気持ちでいっぱいになり、秋宏は頭を下げる。それに対して涼花は首を静かに横に振った。それから穏やかに微笑んで、

「ううん。……秋ちゃんのせいでも、誰のせいでもないよ。それに私は秋ちゃんさえいれば、どんなことが起こっても全然大丈夫だから！」と言つて僕を励ましてくれた。

「じゃあ決まりだな。行くぞ」

松村が屋敷の玄関と思われる扉の前まで歩き、扉のドアノブに手を掛ける。そして一度躊躇いを見せた後、松村は一息にドアノブを回した。ギチツという鈍い音が響き、扉が開く。

屋敷の中は外見の古びた感じとは異なり、綺麗で洋風な雰囲気がある。ついでに。まるで、まだ誰かが住んでいるかのよう……。……。

「……誰か住んでるんじゃないの？ まずくない？」

香苗が不安を隠し切れていない声音で、誰に問うでもなく呟く。その呟きに直人が応答する。

「いや、むしろ誰かが住んでた方が都合がいい。この森の抜け道を知ることが出来るかもしれない」

「ああ確かに！……そんじゃあ、お邪魔させてもらうか」

柴村はそう言つと、屋敷の中に入っていつてしまふ。松村もそれに続いて、「まあ何かあつたらすぐに出ればいいだろ？」と中に入る。白川と香苗もそれに続いた。

「入ろう真下君。大丈夫、きっと何とかなるよ」

直人がまだ判断に迷っている僕と涼花を後押しするように、そう告げて中に入っていく。

「……そうだな。よし、行こう涼花！」

「うん。秋ちゃん」

直人の後押しもあり、二人も屋敷の中へ入ることに決めた。まず涼花が先に中に入り、まだ屋敷の外に立っている僕に手招きする。それで僕も意を決し、屋敷の中へと入った。

「意外と広い屋敷だね。秋ちゃん」

涼花が屋敷の中を見回し、素直な感想を述べる。確かに広い屋敷で外から見た感じで、だいたい三階建てだろうと推測する。

「そうだね。他のみんなは？」

屋敷の中を軽く見渡した後、他の四人がどこにいったか涼花に尋ねる。すると屋敷の入り口から一番近い部屋の扉が開き、他の四人が顔を出した。

「おーい。こつちだ」

松村がそう言うて部屋の中に引つ込んだので、秋宏と涼花も四人のいる部屋に向かい歩き出す。とそこで秋宏は屋敷の扉を閉め忘れたことに気付き、扉を閉めに戻る。

扉の前まで歩み寄ると案の定扉は開いていたので、秋宏はドアに手を伸ばし――

――バタン。

――

「……あれ？」

風でも吹いたのか扉はひとりでに閉まった。

「どうしたの？ 秋ちゃん」

「ん。……いや、何でもない」

秋宏は訝しげに扉を見つめた後、すぐに気を取り直し五人の集合している部屋に歩きだした。

……まさかこの一時間後に悲劇が待っているとは知らずに。

絶望の幕開け

五人のいる部屋に入ると、そこはどうやら食堂のようだった。

綺麗に整えられた椅子が六つに、長方形の大きなテーブルクロスが一つ。さらにはなんと、テーブルの上には数々の料理が並べられていた。

「やっぱり、……誰か住んでるんだよ」

香苗が申し訳なさそうに食堂の辺りを見回す。すると料理を見つめていた直人が何かを見つけたのか、テーブルの前に歩み寄る。そして一枚の紙のようなものをテーブルの上から手に取り、直人はそれを確認する。

「それ何だよ？ 直人」

柴村が直人に問いかけるが、直人は黙ってその紙をこちらに手渡ししてくる。

その紙を受け取った柴村が内容を確認する。そして、「……何だよ、これ？」と言って黙ってしまう。

秋宏も紙に書かれている内容が気になってくる。

「何だよ？ なんて書いてあるんだよ？」

どうやら紙の内容が気になっていたのは自分だけではないようで、松村が柴村の持っている紙を横から覗き見る。それに続くように白川と香苗も横から紙の内容を確認し、驚愕した表情を浮かべた。

「……何だっけ言うんだよ？」

秋宏も涼花と一緒に横から紙の内容を確認する。紙にはただ一言、こう綴られていた。

『 W E L C O M E (ようこそ) 』

背筋を悪寒が走り抜け、同時に嫌な汗が流れ出る。そして直感が告げる、この屋敷は何かがおかしいと……。

「……出よう」

松村が重い口を開き、他の五人も否定など一切せずに頷く。そして六人はすぐに屋敷の玄関へと向かい、玄関前まで来ると松村がドアノブを握り扉を開ける。はずだった。

「あ？……何だこれ？」

松村がドアノブをガチャガチャと何度も回すが、どうしたことが扉は開かない。それを見た秋宏はついさつき起きた出来事を思い出し、なんともいえない違和感を覚える。

「どうして開かないんだよ。……ちっ。しょうがない、窓から出るぞ！」

松村は軽い舌打ちをした後、玄関の扉のすぐ横に取り付けてある窓に歩み寄る。が、そこで彼の動きは止まってしまった。ただ窓を凝視して、「……嘘だろ？」と呟き愕然がくぜんとしている。

「？……どうしたんだよ？松村」

柴村が聞き、五人も松村の立っているところに移動する。それから松村の凝視している窓を見つめてみるが、別段変わった様子は見受けられない。いったいなんだと言うのか？そう思っていると直人がある疑問に気付き、言った。

「……この窓、鍵がついてないぞ？」

「え？……あっ！」

確かに言われて見ると窓に鍵がついていない。それはつまり、窓を開けて外に出るのは実質的に不可能ということになる。すると松村が、「くそっ！」と言いながら窓に拳を叩きつける。しかし余程硬よほどい造りになっているのか、窓には傷一つつかない。

「他の窓はどうだ！？」

松村はそう言って他の窓も全て確認するが、一階の窓は全て鍵がついていない。一階の窓が全部ついていないとなると、同様に上の階も鍵はついていないだろうと秋宏は予測する。

「……どうなってるんだよ」

柴村が落胆した声を上げ、へなへなと床に座り込む。他の五人もどうしたものと頭を悩ます。

「……とりあえず、さっきの食堂に戻らないか？」

直人が言つて、他に意見もなかったので六人は食堂に戻ることにした。食堂に戻つてきた六人はそれぞれ用意されてあつた椅子に座り、テーブルに並べられた数々の料理を眺める。

料理はほとんど肉がメインで、その他は野菜のようなものに赤いソースがかけられただけの簡単なものだった。飲み物もトマトジュースが入った瓶びんが、テーブルの真ん中に一本置かれている。

「どうする？ 食う？」

柴村が全員つかがの反応を窺う。それに対して香苗が、「……食べないと返事を返す。」

「それにしても何なんだこの屋敷、人が住んでんなら顔だせつてんだ！」

松村がテーブルを叩き、屋敷の辺りを睨にらみ付ける。それを直人が言葉で抑える。

「まあまあ……、とりあえず怒つたてしようがないだろ？ きつとこの屋敷のどこかにいるんだから、待っていればそのうち出てくるよ」

直人の言葉に松村も、「そうだな……」と納得し押し黙る。それからしばらくは無言が続いた。

「ねえ、秋ちゃん」

と不意に涼花が話しかけてくる。

「ん、何？ どうしたの？」

「日が沈んだのかな？ 暗くなってきたね」

「……そういえばそうだね」

涼花に言われて携帯を開くと、時刻は午後七時半を少し回っていた。「今日はここで泊まりかもな……」

松村が全員に聞こえるように言う。確かに今この屋敷を出れたとしても、あの森の中を抜け出せる自信は自分にはない。今日はこの屋敷に泊めさせてもらうしかないだろう。そんなことを考えていると白川が、「ん？」と食堂の入り口を見つめる。

「どうかしたか？」

柴村が尋ねるが、白川は目を凝らして入り口を見つめている。そして数秒経ってからこちらに向き直り、

「誰か来る……」

と言った。全員の視線が食堂の入り口に注がれ、妙な緊張感が場を包む。白川の言った通り、誰かの足音がこちらに近づいてきている。「この家に住んでる人だよ。たぶん！」

柴村がそう言い食堂の入り口に向かい駆け出す。秋宏達もそれに続き、入り口まで早足に移動する。入り口から廊下に出ると一人の男が立っていた。

身長は柴村より少し大きいくらいか、百七十九センチといったところだろう。肩まで伸びているボサボサとした髪と、誰にやられたのか横長に傷のついた鼻筋が印象的な男だ。そんな男が、まるで恐ろしいものでも見るかのような目で自分達を眺めている。すると突然はつとした表情になるや、

「君達、……どうやってここに入ってきた!？」

と柴村の肩を掴んで問いただしてくる。柴村は困ったように、「え? え?」と目を白黒させて戸惑っている。

「あんた、ここに住んでる人じゃないのか？」

松村が男に質問する。しかし、それに男が答えるよりも先に上の階から激しい物音が響いた。

それにその場にいた全員が天井を見上げる。すると男は、「ちっ……、来やがったか。君達! 話は後だ。俺について来い!」と早口に言う勢いよく走り出した。それを見て六人は顔を見合す。

「……とりあえず、あの人についていこう!」

秋宏は直感的にそう判断し、男を追い掛けて走り出す。他の五人も秋宏の後に続いて走り出した。

男は疾風の如き速さで二階に続く階段を上っていく。秋宏達も、それに数歩遅れながら階段を駆け上がる。その合間にも謎の物音は続いていった。

「こつちだ！　この中に入れ！」

二階に上がってすぐのところにある部屋の前で、男はそう叫ぶ。秋宏達は男に言われるがままにその部屋に飛び込んだ。全員が部屋に入ったのを確認すると男も部屋の中に入り、部屋の鍵を閉めた。

「……とりあえず、これで安心だ」

男はふうつと深いため息をつきながら部屋の隅に移動する。そこでようやく秋宏は男に疑問をぶつけた。

「あの、……あなたはいったい何なんですか？」

すると男は忘れていたと言わんばかりに、「ああ、そうだったな……」と秋宏達に向き直る。そして、

「私の名前は永井俊彰ながいとしあき、……この屋敷の住人ではないよ」

と軽い自己紹介をしてきた。それを聞いた松村が、驚いた顔で永井と名乗る男に問いただす。

「この屋敷の住人じゃないって、……じゃあお前は誰なんだよ？」

「私は君達と同じようにこの屋敷の中に閉じ込められた人間の一人だ。最初は、君達のように何人か仲間もいたんだが……」

永井はそこで言葉を区切ると、黙って俯うつむいてしまう。

「それから、……どうなつたんですか？」

涼花が恐る恐る言葉の続きを促す。それで意を決したように、永井は口を開いた。

「……みんな、この屋敷の住人に食われたよ」

秋宏は一瞬、自分の耳を疑った。食われただって？　人が？　他の五人の顔を見渡すが、みんな自分と同じように信じられないといった表情をしている。

「……冗談ですよね？」

香苗があくまで冷静に永井に聞き返す。しかし永井は首を横に振り、「信じられないことだが本当なんだ……」

と言ってからすぐに、「そういえば君達、確か食堂にいたよね？

料理とか並んでなかったかい？」と聞いてきた。それに白川が答える。

「はい。……ありましたけど、それが何か？」

「あれは人肉とか、……人の体を裂いて作られた料理だよ」

秋宏の思考が一時的にストップする。今、なんて言った？ 人肉だつて？

「ふざけるのもいい加減にしろよ！ 人肉だ？ お前、頭おかしいんじゃないの！？」

事の成り行きを黙って聞いていた柴村が声を荒げる。だが、永井は真剣な顔で言う。

「ふざけてなどいない。……この屋敷に化け物がいるのも事実だし、料理が人の体の一部だというのも全て事実だ」

「だ、……だったら証拠見せてみるよ！」

柴村がまだ信じられないと言ったように永井に抗議する。しかし、秋宏は何となく永井の言っていることが全て事実なような気がしてくる。テーブルに並べられていた肉料理、あれが本当に人肉だといふのなら野菜のようなものにかかっていたあの赤いソースや、中央に置かれていたあのトマトジュースのような液体。あれは、あれはまさか？

血？

秋宏は胸に込み上げてくるものを必死で抑え、息を大きく吸い込んだ。

「証拠か……。どうしてもというのならこの部屋を出てみるといい」永井は柴村にそう言ってから、目を瞑り黙ってしまう。それからしばらくして、柴村は決心したように部屋の扉に向かい歩き出す。

「待て、柴村。この男の言っていることが本当ならシャレにならなくなるぞ」

直人が制止を試みるが、柴村はそれを振り切るように「大丈夫だつて！」と言いながら、扉の鍵を開けようとする。まさにその時だった、

ガチャツ。ドアノブが、部屋の外側から誰かに回された。全員がはっとした顔で扉を見据える。目を閉じていた永井も、すぐにその音に反応して立ち上がった。

絶望からの逃走

扉にかかっていた鍵が外れると、今までガチャガチャと回り続けていたドアノブはさらに大きく一回りする。それからカチャツという音を響かせた後、扉はゆっくりと開きだした。

そしてまず最初に秋宏の視界に飛び込んできたものは、ドアノブを握る青白い滑りを帯びた人間の手。……いや、違う。これは人間の手なんかじゃない！ そう思っているうちにも、扉は徐々に徐々に開いていく。ちょうど半分くらい扉が開いたところで、柴村が驚愕と恐怖を織り交ぜた様な声で「うわっ！」と叫び、僕らが立っている方へと後ずさってくる。

そんな柴村を横目で確認しながらも、秋宏は意識を扉から逸らそうとはしない。いったい何が現れようとしているのか、その答えを知るために扉が完全に開くのを秋宏は待つ。そして、ついに扉が開け放たれた。

「うおらっ！」

それとほぼ同時に、永井は手に持って構えていた花瓶でそいつを殴り付けた。……そう、そいつを。

「……っ。きゃあああああ！」

香苗もそいつを視界にとらえたのか、そいつに溢れんばかりの絶叫を浴びせる。他の全員もそいつを見て、声にならない悲鳴を上げる。もちろん、僕も。

「いやあああつ！ 秋ちゃん！」

涼花がこの世の終わりのような声を出し、僕の背中の後ろで叫ぶ。あのいつも冷静な直人でさえ、今は目の前の恐怖から逃げようと必死になつて取り乱している。松村や白川もそれに同様だった。

……ただ一人、永井だけはそいつに慣れたように花瓶で対抗している。その間、自分は何も出来ずにその様子を見守りながら、涼花をそいつから庇うように後ろで両手を広げる。

……そいつは、なんともいえない奇妙な生き物だった。ギザギザや平べったいのが交互に並んだ不規則な歯と、五センチほど飛び出した眼球。そこまではまだ気持ち悪いだけで済むのだが、なんと首から下が人の形で形成されているのだ！そして極めつけは、「ヴヴツ……」という低く不気味な声と片手に持っている大きな鉈なただった。そいつはその鉈をなんの躊躇もなく、永井に振り下ろす。それを上手く避けながら永井はそいつの頭に強烈な一撃を喰らわせた。ドコツという鈍い音がして、そいつは一瞬ふらつく。その一瞬を狙い永井はそいつを思いつき蹴り飛ばす。そして、床に倒れ伏したそいつにとどめと言わんばかりに、永井は花瓶を投げ付けた。

ガシャンと言う音がして、花瓶が割れたことを物語る。それから永井は焦ったようにこちらに振り返ると、「何してる！早くその部屋から出るんだ！」と叫ぶや否いなや即座に部屋の外に飛び出していく。「……い、行こうみんな！」

秋宏が言って五人ははっとした顔で我に返ると、脱兎たつとのごとく走り出し部屋を飛び出ていく。

遅れて秋宏も部屋を飛び出す。と、急に秋宏の歩みは止められた。

「うおわっ!？」

見ると自分の足首を、そいつががっちり掴んで鉈を構えていた。

「秋ちゃん！」

涼花が、僕の悲鳴に気付いて振り向いて叫んだ。だがそれよりも先に松村がこちらに向かって駆け出し、僕の足首を掴んでいる手に標準を合わせると、サッカー選手顔負けの蹴りをそいつの手に喰らわせた。

ゴキヤツという骨の折れるような音が、こちらにまで伝わってきた。今の拍子で足首を掴んでいた手は解ほどけ、走り出すことを再開することが出来た。

「悪い、助かったよ」

「おっ」

お互い今は逃げるのが最優先なので、お礼は最小限の言葉で済ま

せて走る。

後ろを振り向くとそいつはまだ諦めていないようで、むくつと床から起き上がり折れたと思われる手で鉈を掴むと、こちらに振り上げ全速力で追いかけてくる。

「っ。……不死身かあいつは!？」

柴村が怯えたように走りながら言う。

「いいからとにかく今は走れ！」

松村に一喝され、柴村は後ろを気にしながらも黙々と全力で走り続ける。

永井は一階の階段を駆け下りると、今度は食堂の隣にある部屋の扉を開ける。そして先ほどのように、「こつちだ！」と叫ぶと中に入っていく。他の全員も、永井の言葉に従いそれに続いた。

部屋に入ると、どうやらここは寝室のようでベッドとタンスがそれぞれ一つ置かれているだけだ。

「この部屋ならそつちにも扉がある。……何、大丈夫さ。朝までの辛抱だよ」

そう言って永井は部屋の鍵を閉めながら、もう一つある扉を指差す。確かにこれなら、どつちからさっきの奴が来たとしても逃げる事が可能だ。だが秋宏はそんなことよりも永井が今言った言葉の中に、一つの不思議な点があったので尋ねる。

「……朝までの辛抱？」

「ん？ ああ、そういうええ言っただけだ」

永井は今思い出したような顔を見ると、秋宏の質問に口を開く。

「あいつは朝方になると三階に上がっていつて襲ってこないんだ。

……だから、とりあえず朝方まで続くこの鬼ごっこから逃げ切れれば大丈夫ってなわけさ」

永井はそう言っただけでやれやれと言わんばかりに肩を竦める。そこで話を横から聞いていた松村が、妙な顔つきで永井に言う。

「永井さん。……あんたの言っただけで、全部マジだったんだ」

「まあ、この状況で嘘をついたって誰も得はないだろう？」

永井が苦笑混じりで答える。と、普段通りの冷静さを維持してきた直人が率直な疑問を永井にぶつける。

「あなたの言ってることを信じたとして、さっきのあいつがこの屋敷の住人ですか？」

「ああ、……たぶんな」

「たぶん？」

「私もまともには理解できていないんだ。……ただ分かっているのは、この屋敷に住んでいるのが化け物つてことと、そいつが人を襲うつてことくらいだ」

永井がそこまで言い終えると、場に嫌な空気が流れる。香苗と白川の二人に至つては、顔を引きつらせて下を向いてしまう。柴村もどつやら奴の顔が頭から離れないようで、恐怖で足が痙攣を起こしている。自分は怖さよりも涼花を心配する気持ちが上回っていて、自然と自制心を整えることが出来ていた。

「ここから出ることは、……出来ないのかよ？」

松村が、これまでの質問で一番重要なことを永井に尋ねた。それに対して永井は首を横に振る。

「残念だが……」

と言つてからすぐに、「いや待てよ？」と顎に手をあてて考える仕草を取る。それから何かを閃いたようで、永井は僕達に顔を向けてこう言つた。

「……脱出の方法がないわけじゃない。あるにはあるんだ」

その言葉に下を向いていた香苗と白川が顔を上げ、柴村も痙攣していた足を無理矢理に抑えながら永井の話の続きを促す。

「あるには、あるんだが……」

しかし永井は途端に口ごもってしまう。

「？……どうしたんです？」

直人が聞くのと、化け物が部屋を開けて入ってきたのはちょうど同じタイミングだった。

あまりに不意な出来事に、一瞬何が起こっているのか理解が遅れる。

現状を理解する頃には、香苗がけたたましい悲鳴を上げていた。目の前に奴がいる。奴は鍵のかかっている扉とは反対側の扉を開け、部屋の中に集まっている自分達を襲ってきたのだ！　そうこう考えられているうちに、奴は自分達に鉈を振り上げて襲い掛かってくる。

「いやあああつ！」

涼花が叫び、頭を抱えて床にしゃがみ込んでしまう。あれでは格好の餌食だ。もちろん奴は、そんな無防備を晒している涼花に近づいていく。

「っ！　涼花、避ける！」

秋宏の言葉に涼花ははっとして顔を上げるが、その時にはすでに涼花の頭上に鉈が構えられていた。

「涼花あああああ！」

必死になって叫びながら、涼花の元に駆け出した秋宏を嘲笑うかのように、鉈は縦に垂直に振り下ろされた。……しかし、

「うわああああ！」

そう叫びながら直人が奴の腹に横から突っ込んだ。鉈は涼花の顔を擦れ擦れで通過しながら空を切った。横からの直人の不意打ちに、奴は床に激しく叩きつけられる。

「ヴアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

それから奴は何ともいえない不快な叫び声をあげると、狙いを涼花から直人に移す。そして持っていた鉈を捨てると、一緒に倒れこんだ直人の肩を掴む。そして、

「ぐわああああつ！？」

直人の腕に奴が噛み付いた。ギザギザとした歯が、直人の色白な手に食い込んでいく。直人はたまらず唸り声をあげ、腕の痛み悶え苦しんでいる。

「お兄ちゃん！！」

香苗が叫び、どうにか助けようと近づいていく。それを直人は噛まれていない左手で制し、「大丈夫！　お前は絶対に近づくな！」と早口に言っていると奴が捨てた鉈に左手を伸ばす。その間にも奴の歯が直

人の腕に食い込んでいき、ついには真つ赤な血がピュツと噴き出した。

「くそっ！ 直人から離れるや化け物！」

見かねた松村が直人を助けようと、何度も奴の体に蹴りを入れるが効果は出ない。永井も現状の打開策たかいさくが思いつかないのか、秋宏達のように傍観者ぼうかんしゃに成り下がってしまったている。柴村に関しては閉めていたもう片方の扉の鍵を開け、いつでも逃げられるぞ！ といった雰囲気だ。

「ふ、ぐぐっ……」

そうこうしていると、直人の左手が床に捨てられた鉈をがっちりと掴んだ。それを直人は急いで松村に投げ渡す。

「……そいつ、で！」

放り投げられた鉈を上手く掴むと、松村はその手があったか！ という顔になり、奴の頭上に鉈の焦点てんてんを合わせる。そして松村は勢いに任せるように、鉈を上から下に振り下ろした。

ドン！ っというぐもった音がした後、奴は直人の腕から噛み付いていた口を放し、頭にめり込むように刺さった鉈に悶えるように床をのた打ち回る。

「い、今のうちだ！」

永井が叫び、他の全員も流れるように扉に向かう。扉を開けて外に飛び出しながら、秋宏は血だらけになった直人の腕を見る。

「大丈夫なのか！？」

「ああ、ただ止血しないとマズいかもだね……」

直人はそう言いながら、痛みに耐えるようにしかめっ面で走る。それを香苗が心配そうに横から眺める。

「急げ！ あいつはあれぐらいじゃ絶対に死なない！ また追いかけてくるぞ！」

永井は逃げ出してきた部屋を、ちらちらと走りながら確認して全員に言い聞かせる。部屋の方に耳を傾けてみると、奴の呻き声うめがまだ聞こえる。これなら当分は追ってこれないだろうと推測し、軽く安あ

堵する。

そして一階から二階に向かう途中の階段で、永井が立ち止まる。

「……永井さん？」

秋宏も立ち止まり、どうしたのかと永井に話しかける。五人もそれで一旦立ち止まる。

「脱出の方法なんだが……」

永井が切り出した話は、さっき奴の乱入によって有耶無耶あやむぎになってしまっていたこの屋敷の脱出方法についてだった。

「確かに、ここを脱出する方法はある。……ただ」

「……ただ？」

そこで永井は一拍いっぱく置いてから、真剣な眼差まなましをこちらに向ける。そして多少の歯切れの悪さを含みながらも、永井は決心したように言った。

「ただ、……その方法にはこの中から必ず犠牲者が出る。そして、すまないがその方法以外にこの屋敷を出る方法は何一つないんだ」

「……え？……」

それを聞いた秋宏の視界がグニャッと不規則に歪んでいき、目先は真っ暗になっていった。

絶望からの脱出法

秋宏の意識が現実に戻されたのは、それから約五秒後に聞こえた涼花の掛け声によってだった。

「秋ちゃん？ 大丈夫？」

その言葉に、秋宏はつとまって涼花の方へ振り向く。涼花は自分とは違ってあくまで冷静に、永井の話を受け止めていた。ただ、いつものような優しさに満ち溢れている表情ではなかった。神妙で深刻な、少なくとも普段の涼花には似合わない顔つきをしている。しかしながら現状が現状なだけに、今の涼花の顔に浮かんでいる表情は、この場に適^てきしていると言わざるを得なかった。

「本当にすまない……。だが、これしか方法がないんだよ……」

永井が間を置いてもう一度口を開き、秋宏の頭の中を彷徨^{さまよ}っている現実逃避という言葉をさらに追い出していく。

「……それを実行した場合、……。つ……。確実に犠牲者が出てしま
うんですよね？」

直人が噛まれた腕の痛みで顔をしかめつつも、永井に問いかける。

「……ああ、少なからず私の想定範囲内ならな。……。そもそもその脱出方法も正直な話、成功するかは二分の一ってところだ。やってみてダメなら全員が全滅^{ぜんめつ}ってことも十分にありえる……」

永井が直人の問いかけに、やや顔を俯^{うつむ}きがちにしながら答える。それを聞いた直人は少し思案顔をした後、「そもそもその脱出方法っていうのは何をどうするんですか？」と永井に尋ねた。それを受けた永井が、そういえばと答えようとした矢先^{やゆ}に、遠くの方から奴がどつどつどつと床を蹴り上げ、地響きを立てながら僕達^{せま}に迫^{せま}ってきた。片手には先ほどまで奴の頭にめり込むようにして突き刺さっていた鉞^{せき}が、奴自身の血によって真っ赤に光っている。口元の血はたぶん、いや確定して直人のものだろう。

「くっそ！ あんだけやってもまだあんなに動けんのかよ!？」

んだ時の表情が誰よりも綺麗で、そして何より人思いな性格で自分のことよりも先に、他人である僕なんかを救ってくれたこの女性を……。

神戸涼花を絶対にこの屋敷から守り抜き助け出すと、真下秋宏は心に誓った。

「ここだ！ ここに入れ！」

そうしていると、前を走っていた永井がある一つの部屋の前で立ち止まり、振り返って全員に言い放った。秋宏は永井が言っている部屋に視線を向ける。部屋はどうやらトイレのようだ。

「こんなところ入ったって、またさつきみたいになるだけじゃねえか！」

柴村が、奴の声が聞こえてくる方向を忙しく見つめながら、永井に文句を言う。だが確かに柴村が言うように、トイレみたいな個室に閉じこもっていたとしても、奴がまた部屋に入ってくるようなことが起きれば直人のように負傷するものがまた出てしまうかもしれない。それだけはなんとしても避けて通りたい道だ。

しかし柴村の意見を聞いても尚、永井は堂々とした表情と態度で全員にこう告げた。

「大丈夫だ！ 少なくともここなら！」

そう言うが早いか永井はトイレの個室の扉を開け、一人で先に中に入っていつてしまう。

「永井さんに何か考えがあるみたいだし、奴もすぐそこまで来てる。

ここは永井さんに従おう」

直人が永井さんの代弁者だいべんしゃになって代わり、全員に言って聞かせる。

「よし！ 入るぞみんな！」

それを受けて今度は松村が言って、全員はトイレの中に駆け込んだ。トイレの中は思っていたよりも広く、しかしながら古びたく汚らしい雰囲気があった。トイレは男性用のようで、所々の壁には無数の穴が開いていたり、その周りには血痕のようなものも付着しているのが多々見られる。

一目見ただけでも、ここで奴と誰かが死闘を繰り広げたことが伝わってくる。

「ここは私が最初に来たときからこの有様だ。……おそらく、何人もの人がここで奴に食われてる。そして私の仲間も全員ここでやられた……」

永井が苦々しいものを思い出してしまったというように罰の悪い顔をする。

「そ、それじゃあ何でこんなところ入ったんだよ!？」

柴村が叫んで非難をあらわにする。が、永井はそれを遮るように続けてこう言う。

「心配するな。こっちに来てみる」

そうして永井は、一番奥にあるトイレの個室まで移動する。全員が訝しげに思いつつも、一番奥にあるトイレの個室まで歩を進めてみると、そこには異様な光景が広がっていた。

「な……何ですか、これ？」

秋宏が驚きで呂律が回らない口調で永井に尋ねる。

「まあ、名付けるとしたら『逆転の逃げ道』といったところか？」

永井が誇らしげに胸を張る。なんと秋宏の目の前の個室には、本来取り付けてあるべきはずである便器が設置されておらず、その代わりに大きな穴がポツカリと開いていた。穴は下の階である一階の、どこかの部屋に通じている。しかも、ちょうどその部屋に置いてあるベッドの頭上に穴が開いているので、これなら飛び降りたとしてもたぶん大丈夫だろう。

「すげえ！ これならあいつが来ても飛び降りて下の階に逃げられるじゃねえか！」

柴村が先ほどとは打って変わり、歓喜の声を上げる。白川や香苗も感心したように穴の下を覗き込んでいる。とりあえず、これで逃げ道の確保が出来た。隣の涼花に目をやると、ほっとしたような顔をして秋宏に視線を合わせてきた。

「確かにすごいですね。……でもどうやって？」

分が壊れておらず、完全には開かない状態だった。それでも狭い個室なので、少しでも近づかれたら捕まってしまう。

早く飛び降りないと！ そう思っていて、こちらに伸びてくる奴の手が邪魔をして動こうに動けない。

「くそっ！」

それでもどうにか下に飛び降りようと、秋宏は試みる。だが、その前に奴の手が自分の着ているジャージの袖を掴んでしまった。秋宏は物凄い力で扉の方へと強制連行される。

ドンッ！ と、奴が先ほどまで扉を叩いていた音に負けなくらいの勢いで、秋宏は上半分がなくなった扉に激しく叩きつけられる。

そして奴は秋宏の袖を掴んだまま、鉈を構える。……マズい！ マズいマズいマズい！ 殺される！

秋宏は決死の思いで、袖を掴んだ奴の手を振りほどこうとしたが、その前に鉈が秋宏の頭上に振り下ろされた。

「……………っ！……………」

秋宏はギョツと目を閉じる。しかし、どうしたことが鉈はいつまで経っても自分の頭上には落ちてこない。秋宏は意を決して、目をそっと開けて奴の方を確認する。すると、あるうことが鉈は上半分だけになった扉に刃が引っ掛かって抜けなくなっていた。……なんとこの奇跡だろう。しかも奴は、鉈を引き抜くことに意識が向いていて秋宏の方を見ていない、逃げるなら今しかない。

秋宏は慎重に、極めて慎重にジャージのファスナーに手を掛ける。鉈が奴の腕の力で、数センチ上に引き抜かれていく。……あと五、六センチ。

ジーツという効果音を響かせながら、ジャージのファスナーが秋宏の手で下におろされていく。

奴の鉈が扉を削りながら、ぐいぐいと上に引き抜かれていく。……

あと二、三センチ。

秋宏の手の感覚が、ジャージのファスナーを下までおり切ったことを自身の脳に伝える。

奴の鉈がついに引き抜かれる！……あと一センチ。

秋宏はジャージを脱ぎ捨て、やっとの思いで今度こそ穴に飛び降りる。ちょうど、それとほぼ同時に奴の鉈が扉から引き抜かれた。

下のベッドに少々叩きつけられながらも、秋宏は何とか二階から脱出することに成功する。

「秋ちゃん！……よかった、無事で」

下ですつと事の成り行きを見守っていた涼花が、全員の中から飛び出してきて自分に抱きついてくる。そんな涼花の頭を優しく撫でながら、「ごめんね、心配かけて……」と苦笑混じりに秋宏は言った。そうしていると永井が上の階を見上げながら、そんな僕達二人に急かすように告げる。

「安心するのはまだ早いぞ！ あいつが飛び降りてくる、さあ逃げろぞ！」

それに僕達二人ははつとして上を見上げる。上では、ちょうど奴が扉を完全に破壊したらしく、穴から飛び降りようと下を見ていた。

「やばい、来るぞ！ みんな走れえええ！」

秋宏はすぐに涼花と走り出し、他の全員もそれと同時に走り出した。秋宏が部屋の扉を開けると、後ろのベッドの方から激しい物音がした。……奴が飛び降りたのだろう。

「どうする？ 次はどこに逃げ込むんだよ！？」

柴村が永井に早口で問う。永井は少々考えてから、「食堂だ！」と大きな声で叫んで走り出す。

「とにかく武器になるものだ！ あいつの動きを、一時的にでもいから止められる物を探せ！」

食堂に向かって走りながら、永井は全員に言っただけで聞かせる。確かに武器になるものがあるとすれば、今のところは食堂が一番だろう。

「武器になるとすれば、テーブルの上にあった料理用のナイフとかか！？」

すると松村が食堂にあるもので、武器になりそうなものの例を一つあげる。

「ああ、他にもどんどん武器になりそうなものは持っておけ！ この屋敷で生き残る秘訣だ！」

永井がそれに付け足しの言葉を加えつつ、僕達は食堂に辿り着いた。食堂に全員が入ると、松村が扉の鍵を閉める。

「よし、武器を探せ！」

永井の掛け声で全員が動き出す。香苗がまずテーブルの上に置いてあったナイフを手に取り、それを左手でギュツと力強く握り締める。まるでこれは自分の武器だ！ と主張するかのように。

自分も奴が来る前に武器を探す。すると涼花が、

「はい、秋ちゃん。これ」

そう言つて僕にナイフとフォークを手渡ししてくる。とりあえず、フォークはズボンのポケットに入れてナイフを右手に構える。少なくとも、丸腰よりは安心できるしこれなら涼花を守ってやることも多少は出来るはずだ。

「みんな武器を探しながらでいい、あいつが来る前に言っておきたいことがある」

すると永井が突然、僕達に向けて話だした。なんだろうと全員が顔を見合わせ、首を傾げる。

「この屋敷の脱出方法についてだ。細かいところを言っていくから、全員よく聞いてくれ！」

それを耳にして、全員が一齐に顔を引きつらせる。……絶対に犠牲者が出る脱出法。しかし、絶対とは言っているものの、それはあくまでも永井の言う想定範囲内の可能性の話だ。だからもしかしたら、僕達が永井の予想以上のことを起こせば、全員無事にこの屋敷から出られるかもしれない！

そんな期待を込めながら、秋宏は話しの続きを雰囲気です。そうして、ついに永井がこの屋敷の脱出方法を語りだした。

「……この屋敷が三階まであるのは全員わかってるな？ ……その三階なんだが、あいつは朝方になると必ずそこに行ってしまう。まるで何かを守るように、な。だから私は決死の思いで三階であいつ

が何をしてるかを調べたんだ。そうしたら……」

「そしたら、どうしたんですか？」

秋宏がさらに続きを促し、永井は少し間を置いてからまた語りだした。

「そうしたら、……一つだけあいつが熱心に守ってる部屋があったんだ。どうにか私はあいつの目を欺あそいてその部屋の中を調べてみた……そして天井に大きな穴が開いてるのを私は見つけたんだ。しかも、ご丁寧にその穴から空模様まで確認できた」

それを聞いて、秋宏の中に希望の光が見え隠れしてくる。

「あれは私一人じゃ無理だった。だが、もしかしたら誰かと協力でもして肩車なり何なりでもすれば、きっとあの穴から脱出が出来るはずだ！」

秋宏の中で見え隠れしていた希望の光は、ついに現実のものとなった。この屋敷から出られる！ 涼花を救ってあげることが出来る！

そんな様々な思いが秋宏の中で駆け巡る。

しかしこの時、秋宏はまだ分かっていなかった。……この脱出の方法を実行した場合に起きてしまう問題、そんな数々の盲点もっぺんがあるということに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4636z/>

食人館《しょくじんかん》

2011年12月23日00時54分発行